

終わりのない旅

ココと12の精霊たち



「終わりのない旅」目次

プロローグ 旅のはじまり

1

第一章

湖を渡る北風　　＼ 献身と浄化の時 ＼

7

ココ　過去とわかれる　　—— 純真の月

8

ココ　カワウソに夢中になる　　—— 浄化の月

10

ココ　旅が怖くなる　　—— 変化の月

12

第二章

草原を走る東風　　＼ 信号と覚醒の時 ＼

14

ココ　あらゆる信号を受け取る　　—— 洞察の月

15

ココ　サイレント・マカに近づく努力をする　　—— 創造の月

17

ココ　もう一つの解決策をみつける　　—— 飛躍の月

19

第三章

森を抜ける南風　　＼ 知恵と成長の時 ＼

21

ココ　傷から立ち上がる　　—— 勇気の月

22

ココ お土産を持ち帰る — 孤高の月 24

ココ 熱を冷まして考える — 知恵の月 26

第四章 川面を駆ける西風 — 内省と強さの時 — 28

ココ みかけにだまされる — 均衡の月 29

ココ 見えないものを探り当てる — 探求の月 31

ココ 一年を振り返る — 思慮の月 33

エピローグ 旅の成果 35

プロローグ 旅のはじまり

北アメリカ大陸のロッキー山脈の麓に、ネイティブアメリカンの少年・ココの部族が暮らす村がありました。

10歳になったばかりのココは、優しくてなんでも知っている「サイレント・マカ」というおじいさんが大好きでした。名も知らぬ薬草、色とりどりの輝きを放つ石…サイレント・マカが持つ不思議な持ち物にココは興味津々でした。そんなココを、サイレント・マカも物静かな微笑みで迎え入れていました。

サイレント・マカはネイティブアメリカンの部族に必ずひとりいる「メディスンマン」と呼ばれる呪術師でした。毎月、村の周りを旅し、そこで受け取ったメッセージを村の者に伝えるのが役目です。そのため、村にいるのはごく限られた時間のみでした。それはココにとって辛いことでした。サイレント・マカが村を去ってしまうとココはひとりぼっちになってしまうのです。ある晩、ココの両親はココに隠れてこんなことを口にしました。

「ココはいつもサイレント・マカの元にいるが、他の子どもたちとはうまくやっているのか」

ココの父親がココの母親にたずねました。ココの母親はひそひそ声で答えます。

「…それがね、友達がいないみたいなのよ。サイレント・マカが旅に出るといつもひとりぼっち。あの子、臆病なくせに口だけは達者だから、他の子とすぐ喧嘩になってしまうの。サイレント・マカはお優しい方だから、あの子をそばに置いてくれるけれど」

「…困ったものだな。サイレント・マカもあんなにココにずっと付いてまわられては務めに差しさわ

りがある。少し距離を置かせたほうがいいのかもしれない」

その両親の会話は、寝たふりをしていたココの耳にも届きました。

（どうして!?　なんで僕がサイレント・マカのそばにいちやいけなの!?　村の子どもたちなんてなんにも知らないやつばかりで、面白くないのに!）

怒りがココの胸を通りすぎると、不安がどっと押しよせました。

（今だってサイレント・マカが村にいない時にとっても寂しい思いをしてるのに……これ以上サイレント・マカと会えなくなってしまうたら、僕は毎日どうやって過ごしたらいいんだろう……）

そして、ココはある決意を固めました。

（絶対、そんなことさせないぞ）

ココは繰り返しそう心で唱えながら、朝を待ちました。

その日は、太陽の光が一年でもっとも短くなる日——冬至でした。朝日は弱々しく、雪に覆われた大地を照らします。サイレント・マカは村の皆を集めると、こう告げました。

「今年も太陽がもっとも短くなる日が訪れ、旅立ちの時となった。明日、わしはトーテムたちの声を授かりに北の湖に向かおうと思う」

その言葉を聞くと、ココは一步前に歩み出てこう言いました。

「サイレント・マカ、お願いします。僕もその旅に連れて行ってください」

村人たちの間に動揺が走りまわりました。ココの両親が慌ててココを止めました。

「なにを言ってるんだ、ココ！ 邪魔になるだけだろう！」

「いやだ！ 僕はもっとサイレント・マカのそばにいたいんだ！」

いやがるココを両親が押さえます。辺りは騒然となりました。

「まあ、待ちなさい」

その時です。低く、威厳に満ちた声が響きわたりました。その声を聞いて、誰もが騒ぐのを止めました。部族の長、ビッグ・ベアがココたちの前に歩みでたのです。

「ココよ。おまえは毎月サイレント・マカがなにをしに旅に出ているか知っておるのか？」

ビッグ・ベアはそう言うと、ココの眼をじろりとにらみました。その眼差しに、ココは心臓の音が早くなるのを感じました。小さな声でココは答えます。

「…トーテムたちの声を…聞くためです」

「では、トーテムとはなんだ」

間髪を入れずにビッグ・ベアはたずねます。ココの額に冷たい汗が流れはじめました。

「…村の入り口の木の下に彫りこまれている、動物たちのことです。それで…えっと…トーテムは僕たちにたくさん知恵を授けてくださいます」

ビッグ・ベアはココから目をそらさずにこう言いました。

「その通り。しかし、おまえの知識は完璧ではない。確かに動物たちはトーテムの一部であり、精霊の化身としてその霊力でわれらを守ってくれている。だが、トーテムとは動物だけを指すのではな

い。他にも植物、鉱物があり、われらにメッセージを送っている。その月に生まれた者には自分を知り、他者と上手く付きあうための知恵を。そして、その月を生きる全ての者には、より豊かに生きるためのメッセージとレッスンを。トーテムがわれらに与えてくれる恩恵は計りしれぬものだ。おまえが思っている以上にな」

ココはサイレント・マカと一緒に旅に出たいと言ったことを早くも後悔していました。それは余りにも分不相応なことでした。ビッグ・ベアもそう言いたいには違いありません。ココはサイレント・マカのほうをちらつと見ました。サイレント・マカは物言いたげな様子で、ココのほうを心配そうに見ています。

ビッグ・ベアは続けて言いました。

「しかし、ココ。おまえが部族の中でとりわけ聡明な子であることも事実だ。サイレント・マカの次のメディスンマンにもなれると私は考えている。ただ、今のままでは到底無理だ。…サイレント・マカ、お願いがあります。ココを旅に連れてゆき、精霊たちの声に触れさせてもらえませぬか。そして、トーテムとはなにか、ココにじっくり教えてやってほしいのです」

その言葉を聞くと、サイレント・マカの顔にもほっとした笑みが浮かびました。

「もとより、わしもそのつもりじゃ。ビッグ・ベアよ、そなたに一年後、ココの見違える姿を見せると約束しよう」

ココは頭がついていきません。…僕は、サイレント・マカと一緒に旅に行ってもいいの？ その戸

惑いを見抜いたビッグ・ベアはココに微笑みかけました。

「さあ、ココ。旅の支度をしなさい。早くしないと、時間がないぞ」

ビッグ・ベアの言葉を聞いて、ココはからだに喜びが満ち溢れていました。

「はい！ ありがとうございます！」

こうして、ココの旅ははじまったのです。

第一章 湖を渡る北風 く 献身と浄化の時く

―冬のスピリットアニマル、ホワイトバッファローが教えてくれること―
ホワイトバッファローは自らの毛皮や肉でわれらの暮らしを支えてくれるありがたい存在じゃ。
ココよ、ホワイトバッファローのように人から感謝される行動をして、献身と浄化に努めるのじゃ。

ココ 過去とわかれる——純真の月

ココとサイレント・マカは村を出ると、何日も白樺の森を歩きました。雪に覆われた大地と白い幹の白樺：一面真っ白の風景が続きます。冬至を迎えたばかりの太陽の光は真っ昼間であっても弱く、雪に反射した光だけがまぶしく輝いています。「純真の月」ならではの風景です。

森を抜けると、そこは霽^{もや}の立ち上る湖でした。湖面を覆う白い霽に紛れて、数十羽の白い鳥が羽を休めていました。——スノーグースです。

湖中がスノーグースの鳴き声で騒がしくなったかと思うと、スノーグースは一斉に空に羽ばたき、あつという間に高い空の中で小さくなっていました。

「あれは今月のトーテム・アニマル、スノーグースじゃ。トーテム・アニマルはその姿や行動でさまざまなメッセージをわれらに伝えてくれる。ココよ、あの白き羽根をよく憶えておきなさい。スノーグースはその姿によって、われらに『真っ白な自分に還る準備をするように』と伝えてくれておるのじゃ」

サイレント・マカがそう言つて北の大地を渡っていくスノーグースの群れを指差すと、クリスタルの透明な石でできた腕輪がきらりと輝きました。

「真っ白な自分？」

「この月は新しい年のはじまり。過去の余分なものを捨て去っておかなければ、新しい年を実り多いものとすることはできんじゃろ？」

ココは、真っ白なスノーグースが空を羽ばたくのをみつめているうちに、去年村の子どもたちとした喧嘩が些細なことに感じられ、すっと心から消えていくのを感じました。そして、この月の旅を終えて村に帰る頃には、来月の旅への期待で胸が大きく膨らんでいたのです。

ココ カワウソに夢中になる——浄化の月

ひと月後、ココはサイレント・マカとともに再び村を離れ、北へ向かう旅に出ました。ココは寒さのあまりマントをたぐりよせました。もう随分、自分たちの姿以外に動くものを見ません。木の枝が風で触れ合う音がざわざと森から響くばかりです。サイレント・マカはその音に耳を澄ませながら言いました。

「この月のトーテム・ブラント、ボブラが風に吹かれておるな。あの木にはわれらの体内から余分なものを排除してくれる効果がある。『最大限、自分を浄化するように』というメッセージを伝えてくれているのじゃ。この月は『浄化の月』と呼ばれておる」

サイレント・マカとココが川の畔に出ると、騒がしい気配がしました。

「なにかいるの？」

そう聞くココに、サイレント・マカは黙ったまま川のほうを指差しました。右手にはめられた、曇りのない銀の小さな指輪が光ります。

ココがその方向に目をやると、カワウソたちが水をかけあったり、岩の上でひょいっと立ち上がったたりしながら、じゃれあって遊んでいました。この厳しい寒さで他に動物などまるでいないというのに、カワウソたちは遊びに夢中になっています。

「トートム・アニマルのオッターが教えてくれるのは、環境にとらわれることなく、ものごとに夢中になれる心を持って、ということじゃ」

そう囁くサイレント・マカの眼もいたずらっぽく笑っています。

「さあ、オッターにも会えたことだし、村に帰るぞ、ココ。あまり水辺にいと身体が冷えてしま
う」

「もうちょっと。ねえ、いいでしょう？」

旅に出て、見るものがすべてが新鮮なココにとっても環境なんて関係ありません。ココは目の前の光景に夢中になっていました。

「…まるでオッターみたいなやつじゃ」

サイレント・マカは呆れたようにつぶやきました。

ココ 旅が怖くなる——変化の月

村から出ると、ココはすぐ先月からの変化に気がつきました。足元の雪がぬかるみはじめていたのです。北風の支配する季節が終わりに近づき、春の気配がそこかしこに迫っていました。

サイレント・マカはその場にかがみこむと、溶けかけた雪を掘りおこしました。すると、オオバコが姿を現しました。地面に這いつくばるように葉を広げています。ココはその草をいたずらに引っぱってみましたが、根は深く張っているようでココのほうが尻もちをつきました。

ココは、迎りをきよろきよろ見回しました。この月のトーテム・アニマルも、オオバコのように、見えにくいところからひっそり自分たちを見ているんじゃないかと思ったのです。

「今月のトーテム・アニマルには、みつからんほうがいいぞ」

ココの心を見透かしたように、サイレント・マカは言いました。

「どうして？」

「天性のハンター、クーガーがこの月のトーテム・アニマルだからじゃ」

ココはクーガーと聞いて震えあがりました。クーガーは慎重に、静かに目標を定めて狩りをします。襲われたらとてもかえません。

「雪が溶けはじめるように、この月はものがごとく変化しはじめる『変化の月』じゃ。クーガーは『静

かな態度で周囲を観察し、変化に備える準備をせよ』と教えてくれておる」

まだ震えているココをサイレント・マカは優しく抱きしめました。

「情けないのう。怖いと思ったら、目をそらしてはだめじゃ。そんな時こそ周りをよく見て、変化に気をつける必要があるんじゃない」

ココはサイレント・マカが身に付けているターコイズの首飾りをみつめていました。ターコイズは汗を吸って本来の水色よりも緑がかった青に変化していました。

ココは初めて旅を続けることを怖いと思いました。しかし、サイレント・マカはそんなココの心に献身的に接してくれました。ココの恐怖はずっと小さくなり、その代わりにサイレント・マカへの感謝が心を満たしていったのです。

第二章 草原を走る東風　　＼信号と覚醒の時＼

――春のスピリットアニマル、イーグルが教えてくれること――

イーグルは天の声を人に伝えてくれる、敬うべき存在じゃ。

ココよ、イーグルのように人に何かを伝え、尊敬されるように行動するのじゃ。

天からの信号を受け取り、自らと周囲のものを覚醒させるのじゃぞ。

ココ あらゆる信号を受け取る——洞察の月

春分が過ぎ、サイレント・マカとココは再び村を旅立ちました。森を抜けると、そこは新緑の草原でした。あらゆる場所でタンポポの黄色い花が顔をのぞかせ、風が吹くと二斉に首を揺らします。まるで、それぞれの場所から見えるものを他の花におしゃべりしているようです。

「すっかり春じゃな」

風は寒い北風から暖かな東風へと変わっていました。「洞察の月」になったのです。

若葉が芽吹き、生気にあふれる光景を見て、ココは自分の心も目覚めていくようでした。いま生きているものすべてが、自分に向かってメッセージを発しています。

空を見上げると、その遙か上のほうでホークが一羽、円を描いて飛んでいました。あの場所からなら、草原中のあらゆるものが目に入ることでしょう。サイレント・マカとココの姿も、おしゃべりしあうタンポポの花も。そして、ホークが狙っている小さな動物の姿も。でも、ホークは自分の獲物だけが目に入ればいいのに、なんて考えたりしないのかな。ココは考えました。そうしたら狩りも楽に終わります。

サイレント・マカは腰の袋から赤黒い石を取り出し、ココの手に乗せました。太陽の光にかざすと光をいくつも反射して、石の中で炎がめらめらと揺らいでいるようです。

「この月のトータム・ストーン、ファイヤーオパールじゃ。この石は不純物が入っているからこそこ
うして輝く。不純物を自らの輝きとしているんじゃない」

ココはその話を聞いて、ホークも目から入る情報は全部、余分な情報だと思わずに受けとっている
のだろうと思いました。あらゆるものがメッセージを発している春の空気は、それを可能にするにぎ
わいで満ちていました。

ココ サイレント・マカに近づく努力をする——創造の月

「創造の月」は川沿いを歩く旅でした。このころには、ココはサイレント・マカからさまざまな話を聞いていました。ココはその話を誰かに伝えたくてたまりません。でも、村に帰っても、ココの話を聞こうとする子どもはいないのです。ココは、前を歩くサイレント・マカの背中をみつめながら歩いていました。ヒナユリの青い花がココの歩く道を彩ります。

（サイレント・マカは知識があるだけじゃなくて、人への接し方もうまいんだ。ヒナユリみたいだ）ヒナユリは球根が食べられるというだけでなく、美しい花としてみんなから愛されているのです。

（あんな風になるにはどうしたらいいんだろう）

ココが川のほうに目をやると、その一部が積みあげられた木の枝でせき止められているのに気がつきました。絶え間ない川の流れを止めるのは、とても難しいことです。——それはビーバーの作ったダムでした。ビーバーは今もせっせと枝を集め、ダムを大きくしています。ビーバーは巣を守るためにどうやってこのダムを考えだし、かたちにしていったのでしょうか。ココはビーバーの技術と努力、そして、その集中力に驚きました。

「サイレント・マカ、あんな立派なダムを作るにはいったいどうしたらいいの？」

ココに呼びかけられ、サイレント・マカもビーバーのダムを見ました。

「信念と忍耐じゃよ」

サイレント・マカはそう答えると、腰の袋から青い石がついた小さな指輪を取りだし、ココの左手の中指にはめました。

「この月のトータル・ストーン、クリソコラの指輪じゃ。同じ青い石でも、ターコイズと違ってその色は変わることがない。この石のように変わらぬ信念と忍耐を持てば、ビーバーのようになにかを作りだせる力が身に付くんじゃ」

ココは迷うことなく答えるサイレント・マカを改めて尊敬しました。そして、一心不乱に枝を集めるビーバーの姿を眺めながら、自分も努力を重ねよう、と強くうなずいたのでした。

ココ もう一つの解決策をみつける——飛躍の月

「飛躍の月」に入ると雨の日が多くなりました。空気もじめじめしています。この月の旅に出たココも浮かない表情をしていました。実は、先月の「サイレント・マカに近づく努力」が空回りしていたのです。ココが懸命に村の子どもたちに旅の話をして、一辺倒なココの話はすぐ飽きられてしまいました。

森はノコギリソウの放つ気高い香りで満ちていました。高い山でも低い土地でも育つ小器用なその草を、ココはうらやましく思いました。

その時、森の奥で枝を踏むような物音がしました。見ると、一頭の小鹿がココをじっと見ていました。ココは小鹿を見て喜び、今まで鬱々^{うつつ}と考えていたのも忘れて声を上げました。小鹿は驚いて森の中へ素早く姿を隠してしまいました。

「ココよ、おまえは運の良い子じゃ。あのディアが、この月のトーテム・アニマルじゃよ。ディアのように『ものごとくにこだわらない柔軟な発想を持ち、いつでも行動できるフットワークを身に付ける』ことが大事じゃ」

サイレント・マカにそう言われると、ココはまたしょんぼりしました。

「でも、僕これ以上どうやって努力したらサイレント・マカに近づけるかわからなくなっちゃったん

だ。発想なんて出てこないよ」

サイレント・マカはココの頭を優しく撫でます。

「問題の解決が困難だった時に、一つのことに集中することが必ずしもいいとは限らないじゃ」

そして、腰の袋から緑と白の色が混じった石が付いた首飾りを取りだし、ココの首に掛けました。緑の部分はまるでコケが生えているようです。

「モスアゲート。この月のトータル・ストーンじゃ。モスアゲートは鉱物界と植物界をつなぐ石なんじゃ。こうして、二つの異なるものごとがあった時に、どちらかを選んだり混ぜたりするのではなく『二つを同時に持ったまま』にするのも立派な解決方法じゃ。ものごとの間をジャンプしてうまく使いわけて、な」

ココの表情が目覚めたようにぱっと明るくなりました。

（努力するだけじゃなくて、旅をしている時は旅を楽しめばいいんだ）

毎月のトータルをめぐる旅は、村にいては決して経験できないことばかりでした。ココは新しい発見を求めて、森の中を走りはじめました。

第三章 森を抜ける南風　　く知恵と成長の時く

―夏のスピリットアニマル、コヨーテが教えてくれること―

コヨーテは危険を察知すると遠吠えをして仲間知らせる。他者とのつながりの大切さを教えてくれる存在じゃ。

ココよ、コヨーテのように自信を持って行動し、周囲からの信頼を得るのじゃ。

そして行動の結果得た知恵で自らも成長するのじゃぞ。

ココ 傷から立ち上がる——勇気の月

一年でもっとも昼の長い夏至が過ぎ「勇気の月」になりました。ココの旅も、ようやく折り返しです。

ココは傷だらけのカーネリアンの腕輪をみつめていました。カーネリアンは柔らかく、傷の付きやすい石なのです。その傷だらけの腕輪が、ココには今の自分の姿のように見えました。ココは村に帰っても、子どもたちから仲間としてなかなか認めてもらえないことが気になっていました。

サイレント・マカはココの表情からなにかを察したのか、ココの腕輪を両手で包みながら言いました。

「傷は行動した結果、付くものじゃ。失敗を恐れないその心こそ尊いものじゃよ。よし、森へ行こう。あの姿を見ればきつと勇気が湧いてくる」

森は茂みに咲くワイルドローズの花で華やかに彩られ、南風に乗ってその香りを運んでいます。そして、森の奥からリズムよく木を叩く心地よい音色が聴こえてきました。それは、キツツキが木を叩く音でした。サイレント・マカは話しはじめました。

「この月のトーテム・アニマルのウッドペッカーにはこんな逸話がある。その昔、大きな山火事があり、森の獣たちはみな一斉に逃げていった。しかし、ウッドペッカーだけが火を消そうと炎に立ち向

かった。だから、ウッドペッカーの頭や背中には赤い羽根がある、とな。ウッドペッカーは『結果を考えずに行動する勇気を持って』と教えてくれる。もしも成長していくことを望むなら、まず行動を起こすことが大事じゃ。さあ、がんばれるな？」

その時、ココのすぐ耳元で鳥の羽はたく音が聞こえました。ココが振り向くと、目の前を色鮮やかな翼を飛ばたかせてキツツキが横切っていました。時間が止まったかのように、ココはあっけにとられました。ふわりとキツツキの赤い羽根が一枚ココの肩に落ちて、ココは我に返りました。その美しい羽根はココを奮い立たせました。

「僕、この旅から村に戻ったら、もっとみんなの輪の中に入ってみるよ」

ココはそう言うのと、村の祭の時に見た戦士の踊りを真似てみました。戦士はウッドペッカーの羽根を身に付けて舞うのです。

ココ お土産を持ち帰る——孤高の月

「孤高の月」に入っても太陽の光はまだ強く、二人に照りつけました。この月の旅は川を目指すはずでしたが、サイレント・マカは鉄のナイフでトータム・プラントのラズベリーを収穫してばかりいます。

「ナイフは錆びてしまったら役に立たないものになるじゃろう？ 周囲の役に立つには、自らを錆びつかせないようにせんとな」

そう言いながらラズベリーを収穫するサイレント・マカの袋は、もういっぱいになろうとしていました。

「：サイレント・マカ、そんなにたくさんラズベリーあっても僕、食べきれないよ？」

「いまにわかるわい」

サイレント・マカが不敵な笑みを浮かべると、その手にある成功と名誉を象徴する石・ガーネットの指輪もうなずくように光りました。

やがて二人は川へ向かって歩きはじめました。日射しは強く、ココは川に着く前に水筒を空にしてしまいました。すると、サイレント・マカはさっき収穫したラズベリーを取りだし、ココに分け与えました。ラズベリーの果汁はココの喉の渇きを癒してくれました。

「ラズベリーは『周囲の人たちの飢えを満たし、困っている人を助けられる存在となるように』というメッセージを伝えてくれておる。しかし、これは自分の分を十分に用意してあるからこそできること。困っている人を助けたければ、こうした独立心も持つておらねばならん」

その言葉を聞いて、ココの頭にある考えがひらめきました。

「サイレント・マカ、僕この残ったラズベリーを村の子どもたちにも分けてあげたいな」

「人を思いやる余裕ができたか！ ココがスタージョンのように自らを信じて堂々と行動できる日も近いな」

（…スタージョンのように？）

スタージョンを知らなかったココは、どういうことだろうと首を傾げました。

やがて二人は川にたどり着きました。川からは水しぶきが上がり、水音が響いています。ココが川の中を覗いてみると、その中に鎧をまとったような大きな魚がいました。——チョウザメです。さっきの水しぶきはこのチョウザメが出したものでしたのです。

「あれがこの月のトーテム・アニマル、スタージョンじゃ。自信と威厳に満ちた魚たちの王様なんじゃ」

旅から戻ると、ココはラズベリーを村の子どもたちと分け合いました。子どもたちは大喜びです。ココもそんな子どもたちに囲まれて、だんだん自信がわいてきました。その姿はチョウザメの堂々としたさまを思わせました。

ココ 熱を冷まして考える——知恵の月

「知恵の月」に入ったところには、夏の暑さもいくらか和らぎはじめていました。旅に出た二人が森で収穫しているのはトーテム・プラントのスミレ——熱冷ましの効果のある薬草です。

「ねえ、サイレント・マカ。ちょっと休んでもいい？」

「…まあ、少しぐらいなら良いが…あまり休みすぎんほうがいいぞ。この季節が終わったら冬なんてあつという間にやってくるんじゃない。そのためには今から準備が必要じゃ。この月のトーテム・アニマルのベアだって、すでに冬眠の準備をはじめておるからな」

ココは茂みに腰を下ろして、サイレント・マカから今月のトーテム・ストーンだ、といって渡されたアメジストの石を眺めていました。すると、ココの頭はさえたつてきました。冷静になってよく考えてみると、収穫、といってもそれだけで終わるわけではありません。保存のための加工もしなければなりません、収穫のための道具を用意することだって必要な場合もあるでしょう。やはり今、準備しておくことが大切なのです。ココは立ちあがり、収穫作業に戻りました。

「ウッドペッカーの勇気、スタージョンの自信だけではだめなんじゃ」

サイレント・マカは収穫の手を休めずに言いました。

「得た経験を自分のものにするには一度落ち着いて、自分の行動がなにをもたらしただかを見定めねば

ならん。人は行動し、体験をすることで成長をする。しかしその時、知恵があれば、より良い行動を取ることも、危険を察知することもできる。仲間から信頼されるためには、そこまでできなくてはならんのだ」

ココは今までの旅がもたらしたものを考えてみました。冬至からはじまった旅は冬、春、夏と三つの季節を終え、ココを大きく成長させました。しかし、それはサイレント・マカとずっと一緒にいられた楽しい時間が終わりへ近づいていることでもありました。

「もうすぐ一年経っちゃうんだね」

ココは寂しそうに言いました。暑い南風は去り、ひんやりとした西風の吹く季節が訪れようとしていました。

第四章 川面を駆ける西風　（内省と強さの時）

―秋のスピリットアニマル、グリズリーが教えてくれること―
グリズリーは優しさと強さを両方持つ動物たちのリーダー。

自らの行いを省みる強さを身に付けてこそ、人は仲間を導ける存在となる。
ココよ、内省する強さを持ち、グリズリーのような周囲を導ける存在となるのじゃ。

ココ みかけにだまされる——均衡の月

秋分を過ぎ「均衡の月」に入った川原には、秋らしい寂しげな風景が広がっていました。川は夕陽を受けて黄金色に輝き、そのそばの木の枝にはワタリガラスが群れになってとまっています。

ココは川原に流れ着いていたバーバスカムで一人遊んでいました。とても滑らかな手触りがするのです。

「ワタリガラスの羽根がなぜあんなに黒いのか教えてあげようか」

ココが振り返ると、そこに見知らぬ男が立っていました。ココの父親と同じくらいの歳の、白い衣服に身を包んだ男でした。ふいに父親が恋しくなったココは思わずうなずきました。

「あれは、もとは白い羽根だったんだ。しかし、悪行を重ねてあのように黒くなったのだ。そんなワタリガラスもこの月のトータム・アニマルとして敬われる存在。ワタリガラスほどの高い知能を持つ者には善や悪などというちっぽけな概念、無用だということだとは思わんかね？」

身なりはきちんとしていて、顔も優しそうでしたが、声は冷たい響きのある男でした。ココが後ずさりしようすると、そこに生えていたバーバスカムのトゲがココの指に触れました。チクチクしていて、とても同じ植物とは思えません。ココの首筋を冷たい西風が駆け抜けていきました。

「レイヴンがトータム・アニマルとして敬われるのはそんな理由からではないぞ」

聞き慣れた声にココはほっとしました。ココの背後に、サイレント・マカがジャスパーの魔除けの指輪をして立っていました。険しい顔で男をにらみつけています。

「レイヴンはその高い判断力でわれらを導いてくれる存在じゃ。それに、その説話もレイヴンの一側面しか表しておらん。白かったその羽根は火事を消そうとして黒くなった、という説話もある」

サイレント・マカに反論されると、男はなにも言わずにその場を立ち去りました。サイレント・マカは男が見えなくなるとココを問いたしました。

「なぜあの男と話しておったのだ」

「なぜって……いい人そうに見えたし……」

「ココよ、なにか判断を下す時はさまざまな角度からバランス良く検証せねばならん。せっかく知恵を身に付けても、それを悪しき者に利用されては意味がなからう」

ココは川原に降りてきたワタリガラスの姿をみつめました。善と悪、二つの姿があるワタリガラス。知恵を正しく使いこなす難しさをココは知ったのです。

ココ 見えないものを探り当てる——探求の月

「探求の月」の旅に出ると、生き物の気配はもう影をひそめていました。広い野原で聞こえるのはココとサイレント・マカが枯葉を踏む音だけです。しかし、ココは二人の足音以外にシュルツ、シュルツと微かな音がしていることに気がつきました。

（この音はなんだろう）

ココは考えました。足音がしないから、足のない生き物だ。それから、あんな藪のなかを通っているんだから体は細いはずだ。これはもしかすると……

「サイレント・マカ、スネークが近くにいるかもしれない」

サイレント・マカはココにそう言われて耳を澄ませました。

「……たしかにおるのう。スネークの毒に気をつけねばな。しかし、よく気づいたな、ココ。周りの状況から自分で本質を探り当てることができるとは。ものごとの本質を象徴する石、マラカイトのようじゃ」

サイレント・マカに褒められたのが嬉しくて、ココは頬を赤らめました。

「しかし、その有能さを鼻にかけて人を傷つけるようなことはしてはならんぞ。この月のトータル・ストーンである銅は錆びると緑色の毒が浮いてくる。鉄は錆びると役に立たないものになるが、銅は

人に害まで及ぼしてしまうんじゃない」

それからサイレント・マカとココはアザミの大きな葉や茎を採りました。アザミはお茶にして飲むと内臓のさまざまな症状や頭痛を治してくれる万能薬なのです。アザミの葉にはトゲがありました。そのトゲは「なにも言わないからって勝手に触らないで」というアザミの怒りのようでした。

「声を出せないのは辛いよね。でも、だからっていたずらに人を傷つけたら、銅の毒やスネークとおんなじだよ」

ココはアザミに小さな声で語りかけながらその葉をもぎました。

ココ 一年を振り返る——思慮の月

森への道は初雪に包まれ、しんと静まりかえっていました。旅は最後の月——「思慮の月」へと入ったのです。木のてっぺんが見えないくらい大きなクロエゾマツの木が雄々しく、時の流れを静かにみつめています。

「ココ、一年旅をしてみてもうじゃった？」

サイレント・マカは倒れた木の上に腰を下ろすと、オブシディアンで作られた黒いナイフを磨きながらココに聞きました。まるで、そのナイフで旅の成果の本質を切りだそうとしているようでした。ココはうつむきながら答えました。

「旅に出る前にビッグ・ベアが言ってたとおりだったよ。僕、トーテムのことも自分のこともなんにもわかってなかった。それなのにあんなに偉そうだった。恥ずかしいや」

サイレント・マカは静かな笑みを浮かべながら言いました。

「それでいいんじゃない。できた、できなかったよりも、振り返って一年の成果を確かめることが今は大事なんじゃ。それに、わしだってトーテムのことはまだわからないことばかりじゃ。毎年、トーテムたちからは新しいビジョンとメッセージをもらっておる」

ココは驚きました。

「サイレント・マカでもそんなこと思うの!？」

「そうじゃよ。これは終わりのない旅なんじゃ。何度もめぐり、新たな発見をして、更に成長する。その繰り返しじゃ」

そういうと、サイレント・マカはココにこのまま静かに待つように言いました。——そして、どれだけの時間が過ぎたでしょう。夕暮れ近くなってココは自分をみつめる視線を感じました。その方向に目をやったココは息を飲みました。

大きな角を持った威厳ある風格の鹿が一頭、ココのほうを見て立っていました。ココはその姿から目をそらすことができなくなりました。

「すごいよ、サイレント・マカ。なんて立派なんだろう…」

「あれがこの月のトーテム・アニマル、エルクじゃ。高貴な姿をしておるじゃろう？ エルクはわれらに出会ってもうろたえることがない。自らの正しさを知り、いつでも胸を張っていられるからじゃ。われらはこの一年を通して、あの姿に近づけたのか考えねばなんのじゃ…」

エピソード

旅の成果

粉雪が降りはじめ、二人は村へと急ぎました。

「…サイレント・マカ、来年も僕、一緒に旅に出ちゃだめかな」

サイレント・マカがココの手を強く握りました。

「いいとも。来年もともに旅に出よう。しかし、来年はもう、わしは教えぬ。おまえ自身の感性でテーマたちから直接、なにかを感じとればよい。そして、来年と言わず、その次の年も一緒に旅をしよう」

ココはサイレント・マカの手に深い皺が刻まれているを感じました。ココの知らない、何十年という時間がそこに凝縮されています。

「やがて、わしが旅を続けられなくなった時はおまえがスピリットキーパーやトーマたちの声を村の皆に伝えなさい。そして、いつか共に旅をしたいと思った者が現れたら、その者を連れて旅をするのじゃ。今のわしらのようにな」

村に着くと、テントの三角屋根がうつすらと雪に覆われています。テントからは暖かな明かりがこぼれています。

「ただいま！」

ココとサイレント・マカがテントに入ると、歓声が二人を包みました。そして、その奥からビッド・ベアが大きな手を広げて迎えました。

「よく帰った。ココよ、一年の旅で学んだことを皆に伝えてくれるか」

「はい」

ココは少し緊張した面持ちで話しはじめました。スノーグースのけがれない純真さ、カワウソの夢中になる心、変化を俊敏に追うクーガー。ホークのあらゆるものを見る目、ビーバーのたゆまない努力、ディアのジャンプする姿。ウッドベツカーの色鮮やかな羽根、チョウザメの堂々とした姿、ベアの知恵。ワタリガラスの善悪二つの言い伝え、物言わぬスネークを探り当てたこと、そしてエルクの高貴な姿…。

ココは皆の眼を見て、12の精霊たちから学んだことを自分の体験を交えながら話します。その姿は堂々としていて、一年前とは別の人間のようでした。以前、ココの話を聞かなかった子どもたちも今は熱心に聞き入り、ココの両親も驚いています。

「素晴らしい成果だ。よし、二人を讀えて宴だ！」

ビッグ・ベアが掛け声を発すると、テントに太鼓を鳴らす音が響きました。村人たちは歌いはじめ、ココも歌の輪に加わります。その日の楽しい宴の声は、冬の長い夜が明け東の空が白みはじめるまでテントの中から聞こえてきたのでした。

終わりのない旅 〽ココと12の精霊たち〽

原案・監修 JUKE 弘井

翻案 酒井理恵

発行者 Spirit of Breeze (株式会社キックファクトリー)

〒150-0002

東京都渋谷区渋谷2-2-5 クルスビル7F

発行日 2012年12月22日

表紙 川口可奈子

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。